

# 建築史の中の『源氏物語』

## ——同時代の住宅像と考証学のあいだ——

赤澤真理\*

### 1. はじめに

『源氏物語』の少女巻には、光源氏の住まいである六条院造営が記される。六条院は、春・夏・秋・冬にまつわる庭を持つ四町から構成される邸宅である。『源氏物語』に示された住宅は、物語が受容されるとともに、中近世における人々の住宅観の形成に大きな影響を与えてきた。

本稿は、『源氏物語』に示された住宅像が、後の中・近世にどのような住宅像と認識されたのか、当時の寝殿造理解を踏まえながら、源氏物語絵に描かれた住空間表現の変遷を明らかにする<sup>1</sup>。

### 2. 寝殿造の空間とその歴史的変遷

#### 2-1. 寝殿造の成立

日本建築は、中国から伝来された意匠と日本的な意匠に大きく区分することができる。平安時代初期の宮殿建築は、公的な施設が中国の様式、私的な施設が日本の様式で建設された。中国様式の建築は、瓦屋根、土間、基壇とし、朱塗り等の着彩を施す。日本の建築は、檜皮葺の屋根、高床とし、色を塗らないなどの要素が特徴である<sup>2</sup>。

寝殿造の空間は、天皇の政務や日常生活の場であった内裏からの影響を受けて成立した。奈良時代における平城宮は、築地の回廊で囲まれた中に、日常政務の場であった朝堂がある。その奥に回廊で囲まれた中に、大極殿があり、国家的な儀礼の

場になった。さらにその奥に、回廊で囲まれた天皇の住まいの領域（内裏）があった<sup>3</sup>。

平安宮になると、中国風の建築である朝堂や大極殿は建設されるが、天皇は内裏内で政務を行うようになる。平安時代前期においては、内裏の中の紫宸殿が天皇の日常政務の場、仁寿殿が天皇のプライベートの場であった。平安時代中期において、清涼殿が天皇の日常政務の場とプライベートを兼ねるようになる。10世紀以後、摂関・蔵人所・殿上人など、天皇と私的関係にある政治機構が発展し、昇殿制が成立する。昇殿制とは、平安時代中期に、公卿と殿上人にのみ昇殿が許可され、天皇の代替りで選定される制度である。平安時代中期以降、朝堂・朝庭における大規模な儀式が少なくなり、庭と室内空間において儀式が運営されるようになる。

#### 2-2. 寝殿造の空間

寝殿造の空間は、母屋の四周に庇が付加された母屋・庇の構成であり、庇の外に、簀子（縁側）という、内部と外部の境界領域を有する。古来の日本の住宅において、開放的な空間と閉鎖的な空間を並置する、室+堂という構成が存在した。室+堂の構成は、天皇が即位して初めての新穀を神に供え、共に食する大嘗祭の正殿の平面や、住吉大社本殿、奈良時代の住宅である法隆寺伝法堂前身建物に示されている。

寝殿造は、開放的な空間の中に、閉鎖的な空間（塗籠）があり、母屋という中央の空間に、庇・孫庇が付加された母屋・庇の構成からなる。基本

\*岩手県立大学盛岡短期大学部講師

的に固定的な仕切りはなく、開放的な空間である(図1)。柱は丸柱で、床は板敷に、寝る所、座る所に、畳を置いた。一つの大きな空間を、几帳・屏風・障子で区切り、生活空間を創り出した。外回りの建具は、黒塗の格子で、上にはねあげることを使用する。後の中世以降は、引き違いの建具となる。そのため、格子は、近世における絵画等において、古代中世の貴族住宅を示す象徴的な要素となる。

寝殿造には、外部との扉に設けられた門(東あるいは西)があり、さらにその内側に中門廊と呼ばれる囲いがあり、二重の扉と扉が存在する。川本重雄によれば、宅地の四周を塀で囲むという古墳時代の豪族館の中に、中国の三合院に倣った中庭型住宅を建てたことに由来するという<sup>4</sup>。門から入場し、中門廊の扉から先の南庭に、入場できる人々は限られた者だけであった。

寝殿造では、正月大饗・臨時客、立后などの公的な儀式から、歌合のような撰閑家の私的な催しに至るまで、様々な行事が開催された。川本重雄によれば、正月大饗では、母屋に公卿が座り、南庭に主人、渡殿に、身分の下がる外記・史が着座した。寝殿造の空間は、各々の儀式的固有性、参加者の身分秩序によって、会場をしつらえた。院政期にかけて、儀式的会場は寝殿から対へと移り、寝殿が消失した。

日常生活においては、寝殿の母屋及び塗籠、庇が主人の居場所であった。南面が儀式空間、北面が日常生活として使用されることが多く、北の台盤所廊に女房がいた。

少し年代が降るが、『たまきはる』(建保7年(1219)成立)における「日常の御所」では、御座所は庇にあり、御所のとばりの内へは上臈でなければ参入しない。大和、三河、常陸のような人々も、申すべきことがあれば、御縁や広廂で御簾を引きかぶって半身を入れて伺候したとある。

「年中行事絵巻」(田中家蔵)の鬪鶏の場面をみてみよう。南庭を舞台に、鶏を闘わせる行事が

開催された(図2)。左(東)側に門があり、門から入場するとその内側に中門廊がある。門と中門廊の溜りの空間で、南庭を見物している人々は、南庭に入れない身分の者達である。

男性貴族達は寝殿の東側に座り、女性は寝殿の西側に、御簾内の几帳の隙間から、庭の様子を窺っている。西側の透渡殿には、女性が扇を手にして姿をあらわしており、女性の中にも、身分による階層が生じていた。

### 2-3. 書院造の空間

年代が降って、6代將軍足利義教の將軍邸(1431年)を検討すると、南側の居室が、母屋・廂の空間、丸柱などの寝殿造の要素を残しているのに対し、北側の居室は仕切られている(図3)。足利義政の別荘が営まれた東山殿(慈照寺)では、現存する銀閣、東求堂の他に、会所・常御殿などの建物が立ち並んでいる。会所では、遊興の際に唐物が飾られ、その装置として床の間が成立する。

江戸時代における書院造の先駆け的な遺構といえるのは、滋賀県園城寺の光浄院客殿(1601年)である。江戸城などの近世御殿の空間にみられる、床・棚を正面にそなえた近世書院造の空間の起源を確認することができる。

寝殿造の空間は、基本的に一つの殿舎に儀式を行う空間と日常生活の空間が混在し、儀式のたびに、空間をしつらえた。近世になると、基本的に一つの建物は、一つの機能に限定され、機能と身分階層によって、建物が奥へと建設される。江戸城における、表・中奥・大奥というゾーニングである。これを日本住宅史では、「一殿舎一機能」と定義づけている<sup>5</sup>。

### 2-4. 書院造から数寄屋風書院造へ

近世の御殿は、建物の表向きの空間は、金碧の障壁画で仕切られた絢爛豪華な様相であるのに対し、奥向の空間には、数寄屋風書院造という、書院造をくずした意匠が選択された。

金碧の襖障子の替りに墨で描いた水墨画や唐紙を貼った襖障子が使用され、座敷飾りの意匠は、自由に装飾的になる(図4)。数寄屋風書院造は別荘建築に採用された。

近世数寄屋風書院造の代表的な事例が、京都の桂川のほとりに建つ、桂離宮である。17世紀前半に、正親町天皇第一皇子の第六皇子であった八条宮智仁親王(1579-1629)・智忠親王(1620-1662)が、『源氏物語』の世界を意識して造営した別荘である。竹の材を使用した月見台、市松模様の唐紙障子など、素朴な素材を用いながら、細かな技巧が施されている。桂離宮が造営された土地は『源氏物語』松風の巻に登場する「桂殿」の由来となった、藤原道長の桂山荘の跡地であった。由緒を知っていた智仁親王が、意図的に邸地を拝領したのである。八条宮家、後水尾院の周辺の公家達は、池に浮かべた船上で和歌を詠み、管弦を奏で、酒宴を設けるといった『源氏物語』に書かれる生活文化を、桂離宮を舞台に体现した<sup>6</sup>(図5)。

### 3. 中近世における寝殿造の意味

平安時代の寝殿造の空間は、内裏や公家邸宅を除いて、室町時代頃に失われてゆく。

#### 3-1. 中世後期の寝殿造理解

6代將軍足利義教邸の寝殿の南側には、寝殿造の空間が継承されていた。足利將軍家では大臣大饗などの公家儀式が継承されており、儀式空間として寝殿が必要であった<sup>7</sup>。いっぽう、京都の市中には寝殿造風の住宅はすでに失われつつあった。16世紀後半の京都市中を描いた「洛中洛外図屏風」(狩野永徳筆、米沢市上杉博物館蔵)に、御所における正月の節会として、寝殿造風の建築が描かれている。寝殿に対が付属し、檜皮葺屋根に黒塗の蔀戸、庭で行われる華やかな舞楽などの表現は、寝殿造が天皇を中心とした公家文化を示す表現として理解されていたことを窺うことができ

る。

寝殿造の空間が失われてゆく時期、『源氏物語』に書かれた寝殿造の用語を学ぼうとする動きがある。『花鳥余情』は、文明4年(1472)に一条兼良(1402~1481年)により記され、後に後土御門天皇に献上された『源氏物語』の注釈書であり、装束とともに、住宅に関する記述がみられる<sup>8</sup>。

#### ・『源氏物語人々居所』「六条院図」

同図は、『源氏物語』中の人々の居所を、24項にわたって記述した書であり、奥書から足利義政所蔵本(1436~1490)(東海大学桃園文庫蔵)と考えられている<sup>9</sup>(図6)。本図は、六条院四町の位置と庭について、物語本文を辿って、東西南北の方向を踏まえ、紙面上に文字をプロットする。中央には、「南の寝殿」とあり、「一のたい」「二の対」「東の放出」「東おもて」「女三の宮の御方」「明石中宮御方」と六条院春の御殿の記述がある。夏(丑寅)の町には、「もとの文殿、にしのたいに玉鬘尚侍すみ給」と書かれ、文殿を空けて、玉鬘が夏の町西対に住んだことを踏まえている。ただ、補注と考えられる「一の対私云ク柏木右衛門口スミシ所也如何」「二の対私云女三宮スミシ所也如何」については誤認である。柏木は父である太政大臣の邸、女三宮は寝殿の西面に住んだ。このように室町時代後期になると、足利義政周辺における『源氏物語』の寝殿造に対する関心を窺うことができる。

#### ・『十帖源氏』六条院図

時代が降り、『十帖源氏』は野々口立圃(1595~1669)が記した『源氏物語』の梗概書で版本として流布した<sup>10</sup>。本書末尾の古系図の後に六条院図・二条院図がある。

六条院図には(図7)、東南に「源氏」、西南に「秋好中宮」、西北に「明石上」とあり、東西南北の登場人物の居所は、本文と一致する。しかし、東北にあるべき花散里の住まいが、図では西に寄せられている。北側には、紫上・姫君・女三宮・玉鬘の住まいが書きこまれている。実際には、紫

上・姫君・女三宮は、辰巳の町東南に居住していた。『十帖源氏』は、女性達の住まいを源氏からは別にし、敷地の北側に描いている。

この中で、寝殿の東面に住んだ姫君、寝殿の西面に住んだ女三宮の二人を、隣同士に描き、寝殿の東対に住んだ紫上の居所を、東側後方に位置づけており、本文の記述を踏まえた可能性がある。

いっぽう、夏の町西対に住んだ玉鬘の居所は、花散里の居所より、西側に位置づくべきだが、明石の居所があって遮られてしまっている。このように、考証を試みているものの、平面のプランに落としこんだ時に矛盾が生じている。

庭の描写をみると、築山と池が描かれている。西南の秋好中宮の邸宅前には、元々小高い山があり、滝・池を造ったが、これに一致している。また、北東には、涼しげな泉・馬場殿があったが、源氏の住まいの隣に、「馬場」と書かれた一角があり、対応している。しかし、春の町の東南にあった高い山が、図では北東にある。紫上の御前に山を描くことを優先したためと考えられる。

この中で、紫の上の御前から、秋好中宮の御前まで、池が繋がっている。これは「胡蝶」に書かれた六条院春の町での船乗において、秋の町の中宮の女房達が竜頭鷓首の船に乗り、池をつたって秋の町から春の町へ移動する本文を根拠としている可能性がある。鑑賞者が本図をもとに、六条院の華やかな生活をイメージしたと考えられる。

六条院の下には二条院の図が掲載される。中央に源氏、西に花散里、東に明石と書かれている。さらに北には、末摘花・空蟬の居所があり、「松風」に記された二条院東院を示したものと考えられる。寝殿を空けて源氏の居所とし、西の対から寝殿の渡殿にかけて花散里の居所や家司の詰所、東の対は明石の御方の住まいを予定に、北の対は特別に広く造って、心をかけた女性を住まわせるように仕切りを設けた。図には「末摘」「空蟬」とあり、本文によく沿っているが、渡殿は描かれていない。

17世紀において、今日のような寝殿造の明確なイメージは存在していなかったことが窺える。

### 3-2. 近世前期の寝殿造理解

徳川幕府が成立すると、徳川家の儀式の規範が確立され、寝殿は建設されなくなる。近世前期になると、寝殿造は天皇の住まいである内裏の紫宸殿・清涼殿、公家邸宅に古式的な様相が踏襲されるのみとなった<sup>11</sup>。

近世における寝殿造は実態としては失われたが、近世の天皇家や公家の生活様態として継承された。後水尾天皇（1596-1680年）を中心として開催された、名所に歌われた土地で、四季折々の行事を催し、池に浮かべた船上で和歌を詠み、管弦を奏で、酒宴を設けるといった生活である。

近世においては、大名家の婚礼道具として、『源氏物語』を主題とする絵画や調度が数多く制作された。『源氏物語』『伊勢物語』『栄花物語』などを題材とする物語絵を描いた障壁画は、近世内裏及び院御所に、天皇・公家の主題として採用された。寛文度（1662）内裏小御所、宝永度（1709）内裏常御殿の上段・中段・広廂、寛文度・延宝度（1675）姫宮御殿等に選択された<sup>12</sup>。

武家の女性の生活空間に源氏物語絵の主題が描かれた。特に、『源氏物語』『栄花物語』は、江戸城の本丸・西ノ丸の大奥対面所に選択されており、武家側の視点から源氏物語絵は女性の住まいにふさわしいと考えられていた。この時、画面に描かれた寝殿造（黒塗りの格子・几帳など）は、平安風の装束を着た男女、庭の植物とともに高貴なイメージが重ねられたと考えられる。

17世紀前半制作「東照宮縁起絵巻」（日光東照宮蔵（狩野永徳筆）、和歌山県立博物館蔵他（住吉如慶筆）には、家康の母が家康を出産する場面、家康が臨終をする場面に、寝殿造の表現が選択されている。黒塗りの格子や几帳といった寝殿造の要素は、通過儀礼にふさわしいイメージが重ねられていたと考えられる。いっぽう、「東照宮縁起絵

巻」に家康が天皇の使者と対面する空間は、書院造の表現で描かれており、徳川家の権威を表現するためには、近世書院造が選択された。

同じような状況として、17世紀に後水尾天皇に將軍家の娘である東福門院和子が入内した際、伝統的な内裏の中で、和子の御殿は、武家的な近世書院造で造営された<sup>13</sup>。

### 3-3. 江戸時代後期の寝殿造理解

寝殿造が復原考証の対象となるのは、18世紀後半における寛政度内裏復古造営が契機となる。朝廷儀式の復興は、17世紀後半の後西天皇(1637-1685)や霊元天皇(1654-1732)による古記録の書写に開始され、光格天皇(1771-1840)の在位中に、朝廷儀式を執行する空間として、内裏が復古造営される。この造営が、近世に共有された寝殿造像の転換期となる。

1788(天明8)年に天皇の住まいである内裏が焼亡する。朝廷儀礼の復興に熱心であった光格天皇の意向と老中松平定信により、内裏の平安様式での復古造営が企画された。造営を担当したのは、京都の公家である裏松固禪である。固禪は、尊王思想家による宝暦事件に連座する形で宮中への出仕を止められ、永い蟄居生活を過ごした。その間、平安内裏に関する膨大な古記録・絵画史料を収集し、『大内裏図考証』、また貴族住宅に関する『院宮及私第図』を編纂する。この双方により、固禪以降の日本住宅史研究が格段に進展し、戦前までの寝殿造研究の基礎となる。その後、天保4年(1842)に日本最初の住宅史通史『家屋雑考』が成立する。『家屋雑考』に初めて「寝殿造」「書院造」の定義が登場し、今日における日本住宅史観が形成された<sup>14</sup>。

19世紀になると、松岡行義による『源語図抄』『源氏類聚抄』(宮内庁書陵部蔵)等の史料が編纂されるようになる。『源氏物語』本文から建築・調度・装束の記述から用語を抜き出し、裏松固禪著『大内裏図考証』『院宮及私第図』から図面を

引用する(図8)。帚木巻に登場する寝殿について、「寝殿ノ制尊卑ニヨリ又人ノ心ニ随テカハレリ今コヽニ載セス」とあり、ただ先行研究に依拠するのではなく、行義の慎重な態度が示されている。本書は、「寝殿」の歴史的用例を集めた資料であるとともに、19世紀における考証学の水準を把握する上でも貴重である<sup>15</sup>。

## 4. 近世源氏物語絵に描かれた住空間の変容

中・近世における寝殿造理解の変遷を背景に、描き継がれた源氏物語絵を通して、近世の上流階級が『源氏物語』に示された住空間をどのように理解したのか、視覚的に明らかにしていきたい。

『源氏物語』は10世紀に成立し、その後、すぐに絵画化がはじまったとされている。その後、中近世を通して、源氏物語絵の制作は続き、多くの源氏物語絵が現存する<sup>16</sup>。

橋姫巻は、宇治の山里で、薫が透垣の隙間から姉妹を垣間見る場面は、現存最古の12世紀から描き継がれてきた図様である。橋姫の宇治の山里で、薫が透垣の隙間から姉妹を垣間見る。いずれの絵においても、外にいる薫と室内にいる姉妹の図様を継承していることが分かる。

12世紀の源氏物語絵巻には、丸柱で、室内には何も置かれていない、簡素な寝殿造の空間を示している(図9)。その後、16世紀の源氏物語絵においても、簡素な様相は継承するが(ハーヴァード本)、17世紀の源氏物語絵になると、室内に華やかな金の几帳が登場する(図10)。寝殿造の時代には存在していなかった几帳である。さらに、17世紀の半ばになると、桂離宮で使用された、唐紙障子などの数寄屋風書院造の要素が混在する(図11)。以下、もう少し具体的に描かれた住空間を検討してゆく。

### 4-1. 近世書院造への変容－17世紀初頭

源氏物語絵に描かれた住空間は、開放的な寝殿

造から襖障子で仕切られた書院造の空間へと変容する。その中で、比較的古式な様相を継承しているのが、16世紀に制作された土佐光信（1434-1525）が描いた源氏物語絵である。光信が描いたハーヴァード大学美術館蔵「源氏物語画帖」は、物語54巻の絵画が全てそろった現存最古の源氏物語絵である<sup>17</sup>。空蟬の巻、光源氏が格子から、室内にいる碁をする空蟬達を垣間見る場面をみる。ハーヴァード本では、開放的な空間に、母屋・廂の構成がのこされている、寝殿造の様相が継承されている（図12）。

いっぽう、17世紀初頭に、土佐光吉（1539-1613）によって描かれた京博本では、つがいの白鶴が描かれた金碧の襖障子で仕切られた近世的な住空間となり、襖障子で仕切られた部屋に、空蟬達が座る（図13）。さらに、秋草が描かれた金碧の屏風があり、畳も、床一面に敷き詰められている。

絵合巻では、同じく土佐光信工房が制作した、16世紀の天理大学図書館本では、絵合の箱を中央に置いて、板敷に畳を置いて、公卿が並ぶ様子である。柱は寝殿造の要素である、丸柱である。

16世紀の光信筆天理大学本では、寝殿造における歌合の座を継承するが（図14）、17世紀に制作された久保惣本では、畳が一面に敷き詰められ、歌合の座の位置を人々が無視して自由に座っており、金碧の障壁画が描かれるようになる（図15）。

ハーヴァード本が比較的古式な建築的要素を残しているのに対し、17世紀の土佐光吉による源氏物語絵には同時代的な様相が投影されていることが分かる。光吉の絵において、金碧の襖や屏風は、特に、光源氏を中心とした貴族達の日常の住まいに数多く描かれる。貴族達の華やかな住まいを表現するために、平安時代には登場していなかった金碧の襖障子・屏風が選択された。

いっぽう、天皇の住まい描く場合には、金碧の襖や屏風はなく、板敷の比較的簡素な様相が踏襲された。その後、17世紀中頃になると、天皇の住

まいにも近世的な様相が混在してくる。

桐壺巻、光源氏元服儀式の場面をみると、17世紀初頭の土佐光吉が描いた久保惣本では、中世的な庭を正面とした形式を採る（図16）。ところが、17世紀半ばの土佐光則時期になると、庭に対して平行に座る近世的な対面形式と、金碧の襖障子が選択されるようになる（図17）。光源氏と天皇の権威を表現するためには、同時代の建築様式である、近世的な書院造の空間が援用された。

絵師である土佐光吉は、戦国時代に堺で活躍した絵師であり、光吉が描いた源氏物語絵は、徳川秀忠や近衛信尹などの当時の高位の公家や武家に関わる環境で制作された<sup>18</sup>。画面には金が多く使用され、金に囲まれた空間を構築するようになる。

#### 4-2. 寝殿造への復古と数寄屋風書院造への変容 —17世紀半ば

17世紀半ばになると、源氏物語絵に描かれた住空間に、数寄屋風書院造への変容と寝殿造への復古といった多様な表現がみられるようになる。それは、土佐派以外にも、住吉派・狩野派・琳派といった様々な絵師集団により源氏物語絵が描かれたことによる。各画派は、それぞれの表現に差異を出し、独自の源氏物語世界を生み出そうとした。

前述した桐壺巻、光源氏元服の儀式場面では、土佐光則の弟子で、住吉派を創始した住吉如慶筆「源氏物語画帖」（サントリー美術館蔵）では、天皇と光源氏の座が庭を正面に天皇が座る古式的な座位置に復古し、天皇の背後には平安風の紺引の襖障子が使用されている（図18）。

日常的な生活空間では、これとは別に新しい室内意匠を取り込む。真木柱巻、雪の夜、玉鬘に通う鬘黒大将に北の方が、火取りを投げかけた場面では、16世紀の土佐光信によるハーヴァード本では、厚縁の大紋高麗縁の上に座る鬘黒大将と北の方が居て、鬘黒大将に火取を投げている。奥には白平絹の几帳がかかる帳台があり、女房達は板敷に座っている。比較的簡素な室内である。

17世紀初頭の土佐光吉筆による久保惣本では、秋草の金碧の襖障子に、敷き詰められた畳が描かれている。女房達は、枝垂れ桜が描かれた襖障子で仕切られた隣の室から様子を窺っている。近世的な華やかな空間へと変容する（図19）。

17世紀半ばの住吉如慶筆によるサントリー一本では、淡彩の秋草の襖障子、几帳の文様は繊細となり、金碧とは異なる瀟洒な空間となる（図20）。均整のとれた意匠には、寛永期の宮廷を中心に隆盛した「綺麗座敷」という美意識が窺える。

住吉派の源氏物語絵には、紀伊屋敷での風流な接待、紅葉の折の行幸など、宴の場面が強調されるようになり、そこに開放的な寝殿造の表現が復古的に示されるようになる。宇治や小野などの京以外の住まいには数寄屋の要素が登場する。繊細で装飾的な意匠・庭に対して開放的な寝殿・山里への憧れといった要素は、桂離宮などに具現化された数寄屋風書院造とその生活像を見出せる。

住吉派は、17世紀に土佐派から分派した画派である。住吉派の描いた絵画には、「伊勢物語絵巻」（東京国立博物館蔵）など、復古的な寝殿造の空間に、貴族達が宴を開く生活様態が強調されている。また、内裏などに、史料をもとにした復古的な考証も試みた。住吉派は、後西天皇の命により「年中行事絵巻」の模写をするなど、宮廷文化に精通しながら、徳川家を中心とした大名家にも積極的に関わった絵師集団である。近世公家が理想とした生活像を描き、近世における寝殿造イメージを具体化したといえる<sup>19</sup>。

#### 4-3. 寝殿造の復古的理解の定着

##### —18世紀後半から19世紀

18・19世紀の源氏物語絵になると、12世紀から15世紀の絵巻物を参照し、寝殿造への復古的な様相で描かれるようになる。幕府御用絵師として活動した、住吉廣行（1755-1811）狩野晴川院（1796-1846）は、14世紀頃の絵巻物に描かれた襖・几帳・板敷きに置畳などの古式的な構成

要素を引用して描くようになる。冷泉為恭（1823-1864）は、母屋と廂の関係など、寝殿造の構成を考証して描いていることに特徴がある。細密な調度・装束、建物が描写されている（図21）。

#### 5. 近世における復古意識の変化

最後に、近世の絵師が遺した住宅史史料にふれる。18世紀後半の裏松固禅による『大内裏図考証』の編纂を契機とし、19世紀になると、12～15世紀の絵巻物を網羅的に調査・研究し、描かれた建築的要素を整理した資料集が数多く編纂されるようになる。例えば、狩野晴川院筆「古画抄出」（東京藝術大学美術館蔵）は、様々な古絵巻から建築表現を抜き出している。18世紀後半から19世紀の源氏物語絵に描かれた寝殿造の復古は、このような編纂資料を基に制作されたことが窺える。

遡って、17世紀においてすでに、12世紀～15世紀の絵巻物に描かれた建築の構成要素を学習したことが明らかとなる史料に、東京藝術大学所蔵住吉家粉本『屋舩抜写』がある（図22）。

『屋舩抜写』には、17世紀の年紀を記す資料が確認でき、すでに、17世紀から、古い絵巻に描かれた建築の要素を写すことが行われていたことが分かる。しかし、『屋舩抜写』には、典拠元の絵巻が記されておらず、19世紀の編纂書のように秩序に基づいた歴史意識は見出せない。

18世紀後半からは古代の寝殿造を資料に即して理解することが定着した。その結果、古い絵画に描かれた図様を整理した資料集が作製され、全体像を含めた寝殿造の復古的表現が可能となった。

#### 6. おわりに

源氏物語絵に示された住宅像は、絵が制作された当時のあるべき上層住宅の様相と、同時代における寝殿造に対する考証研究の成果の融合であり、時代により、大きく変容を遂げた。今日の『源氏

物語』の住宅理解は、基本的に江戸後期における有職故実学を継承したものだといえる<sup>20</sup>。

江戸後期の有職故実学の隆盛、朝廷儀礼の再興の中で、内裏が平安復古造営される。裏松固禪の寝殿造研究の流布とともに、復古的な寝殿造像が確立する。この際、源氏物語絵に描かれた住宅においても復古的な表現が選択され、『源氏物語』の住宅を作図し、考証した注釈書が登場する。しかし、それ以前の中・近世に、多様に描き継がれた源氏物語絵の住空間は、かつての人々が思い描いたあるべき源氏物語の居住空間のイメージを現代に伝えてくれる。『源氏物語』は、虚構世界を題材とすることからこそ、そこに各時代における人々の想像力を託す余地があったといえよう<sup>21</sup>。

注)

- 1 本報告の一部は、赤澤真理『源氏物語絵にみる近世上流住宅史論』中央公論美術出版、2010年、森田直美・赤澤真理・伊永陽子「源氏物語の住文化とその受容史に関する研究」住宅総合研究財団研究論文集37号、2010年等に活字化されている。また、先行研究に、平山育男「寝殿造と現代」『講座源氏物語研究第9巻源氏物語と現代文化』おうふう、2007年がある。
- 2 『日本建築史図集』彰国社等を参照。
- 3 古瀬奈津子『日本古代王権と儀式』吉川弘文館、1998年。
- 4 川本重雄『寝殿造の空間と儀式』中央公論美術出版、2005年。
- 5 平井聖『日本住宅の歴史』NHKブックス、1974年、大和智「城と御殿」日本の美術405号至文堂、2000年。
- 6 斎藤英俊『名宝日本の美術第21巻 桂離宮』小学館、1982年。熊倉功夫『後水尾天皇』中央公論新社、2010年。西和夫『数寄空間を求めて—寛永サロンの建築と庭』学芸出版社、1983年等。
- 7 川上貢『日本中世住宅の研究 新訂』中央公論美術出版、2002年。
- 8 1 前掲書、住宅総合研究財団研究報告書を参照。
- 9 寺本直彦『源氏物語受容史論考続編』風間書房1983年。
- 10 万治4年(1661)刊、国文学研究資料館初雁文庫蔵を対象とした。吉田幸一『絵入本源氏物語考』青裳堂書店、1987年、清水婦久子「近世源氏物語版本の挿絵」『講座平安文学論究第八巻』、風間書房、

- 1992年。
- 11 藤田勝也「近世二條家の屋敷について—近世公家住宅の復古に関する研究 1」日本建築学会計画系論文集、636号、2009年他。
- 12 小沢朝江「近世内裏・公家住宅における物語絵障壁画の性格について」日本建築学会学術講演梗概集F-2、2007年。
- 13 藤岡通夫『京都御所新訂』中央公論美術出版、1987年。
- 14 川本重雄「寝殿造と書院造—その研究史と新たな展開を目指して—」『古代社会の崩壊』東京大学出版、2005年。西和夫「平安王朝への追慕—京都御所と仙洞御所」『日本名建築写真選集第18巻京都御所仙洞御所』新潮社、1993年。藤田勝也編『裏松固禪「院宮及私第図」の研究』中央公論美術出版、2007年、加藤悠希『近世・近代の歴史意識と建築』中央公論美術出版、2015年等。
- 15 赤澤真理・伊永陽子・田村隆・森田直美「宮内庁書陵部蔵『源氏類聚抄』翻刻・解題」総合文化研究所紀要 32~33、同志社女子大学、2016~2015年。
- 16 秋山光和「源氏絵」日本の美術117号、至文堂、1977年。『豪華源氏絵の世界源氏物語』学習研究社、1999年(田口榮一「源氏絵の系譜—主題と変奏—」所収)。榎原悟「住吉派『源氏絵』解説—附書本詞書—」(サントリー美術館論集三号、サントリー美術館、1989年)。
- 17 千野香織・亀井若菜・池田忍「ハーヴァード大学美術館蔵『源氏物語帖』をめぐる諸問題」国華1222号、1997年。メリッサ・マコーミック「ハーヴァード大学美術館蔵『源氏物語画帖』と『実隆公記』所載の『源氏絵色紙』」国華、1241号、1999年。
- 18 河田昌之「『源氏物語手鑑』考」『和泉市久保惣記念美術館源氏物語手鑑研究』和泉市久保惣記念美術館、2006年。稲本万里子「京都国立博物館保管『源氏物語画帖』に関する一考察」国華1223号、1997年。
- 19 赤澤真理「近世源氏物語絵に示された王朝の世界—住吉具慶筆「源氏物語絵巻」(MIHOMUSEUM蔵)にみる貴族住宅・洛外・遊興の表現を通して」『空間史学叢書 2』岩田書院、2015年。
- 20 太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館、2010年(新装版)。池浩三『源氏物語—その住まいの世界』中央公論美術出版、1989年。池浩三編「源氏物語における建築」『源氏物語の鑑賞と基礎知識空蟬』至文堂、2000年。浅尾広良「『源氏物語』の邸宅と六条院復元の論争点」(倉田実編『王朝文学と建築・庭園』竹林舎、2007年)などがある。



21 清家清（1918～2005年）による自邸は、王朝風の住宅を目指したもので、移動式の置畳を使用する。

図版は以下の書籍・論文より転載させていただいた。

図3 藤田勝也・古賀秀策『日本建築史』昭和堂、1999年。

図4・図5『名宝日本の美術第21巻 桂離宮』小学館、1982年。図6・図7・図22赤澤真理『源氏物語絵にみる近世上流住宅史論』中央公論美術出版、2010年。図8 赤澤真理他「宮内庁書陵部蔵『源氏類聚抄』翻刻・解題」総合文化研究所紀要 33、同志社女子大学、2016年。図9・図10・図11・図13『豪華源氏絵の世界源氏物語』学習研究社、1999年。図12千野香織・亀井若菜・池田忍「ハーヴァード大学美術館蔵「源氏物語画帖」をめぐる諸問題」国華1222号、1997年。図15・図19『源氏物語手鑑研究』和泉市久保惣記念美術館、2006年。図14『源氏物語千年のかがやき』国文学研究資料館編、思文閣、2008年。図16『江戸名作画帖五、光則・光起・具慶』駸々堂出版、1993年。図17・図18『古筆手鑑と画帖の名品』サントリー美術館、2001年。図21『絵画でつづる源氏物語～描き継がれた源氏絵の系譜』徳川美術館、2005年。

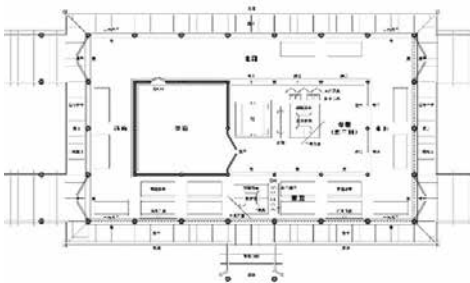


図1 寝殿の平面図  
(池浩三参考文献20より作図)

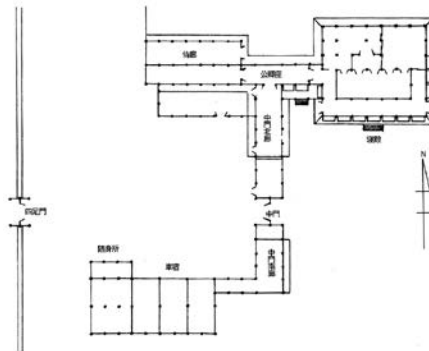


図3 六代將軍足利義教の將軍邸（1431年）

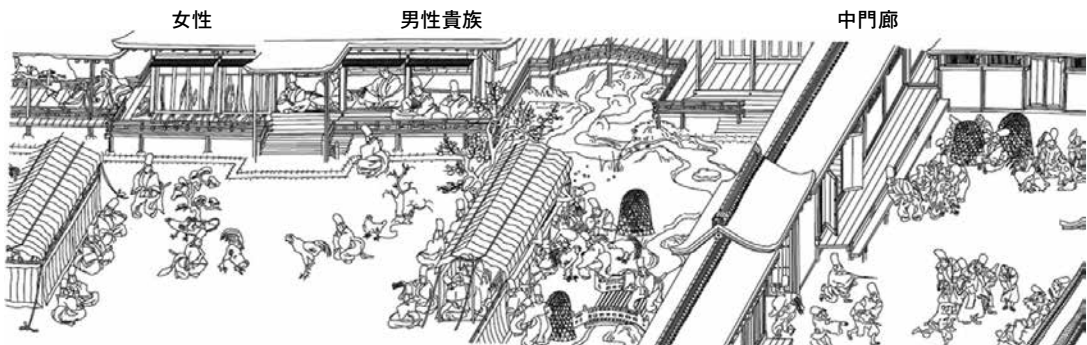


図2 「年中行事絵巻」(田中家蔵)



図4 東福門院対面所  
(修学院中御茶屋)



図5 桂離宮古書院 月見台



図6 『源氏物語人々居所』  
(東海大学桃園文庫蔵)  
15世紀



図7 『十帖源氏』 17世紀  
(国文学研究資料館初雁文庫蔵)

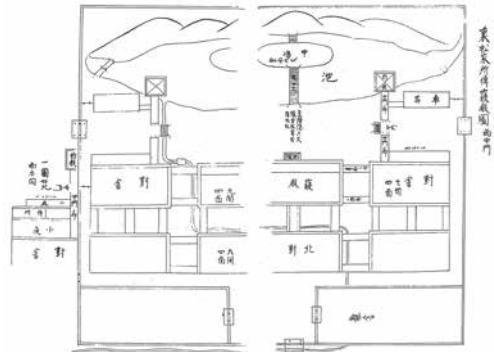


図8 『源氏類聚抄 帚木』 19世紀  
(宮内庁書陵部蔵)



図9 「源氏物語絵巻」 (徳川美術館蔵) 12世紀



図10 「源氏物語画帖」  
(京都国立博物館蔵、土佐光吉筆)  
17世紀初頭



図11 「源氏物語絵巻」(MIHO MUSEUM蔵、住吉具慶筆) 17世紀半ば



図12 「源氏物語画帖」(ハーヴァード大学美術館蔵、伝土佐光信筆) 16世紀初頭



図13 「源氏物語画帖」(京都国立博物館蔵、土佐光吉筆) 17世紀初頭



図14 「源氏物語絵合冊子表紙絵」(天理図書館蔵、土佐光信筆) 16世紀初頭

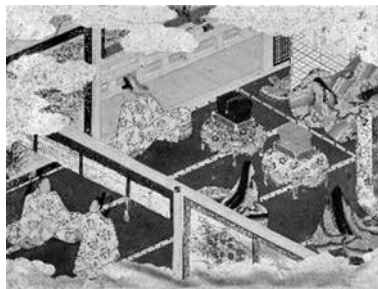


図15 「源氏物語手鑑」(和泉市久保物記念美術館蔵、土佐光吉筆) 17世紀初頭



図16 「源氏物語画帖」(徳川美術館蔵、土佐光則筆) 桐壺 17世紀前半



図17 「源氏物語画帖」(サントリー美術館蔵、住吉如慶筆) 桐壺 17世紀半ば



図18 「源氏物語画帖」(サントリー美術館蔵、住吉如慶筆) 絵合 17世紀半ば



図19 「源氏物語手鑑」(和泉市久保物記念美術館蔵、土佐光吉筆) 真木柱 17世紀初頭

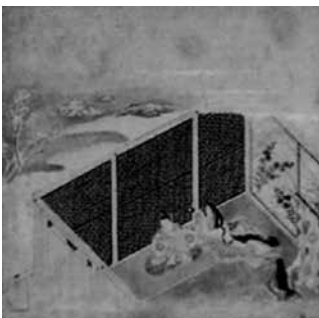


図20 「源氏物語画帖」(サントリー美術館蔵、住吉如慶筆) 真木柱 17世紀半ば



図21 「源氏物語図」(MOA美術館蔵) 為恭筆 19世紀

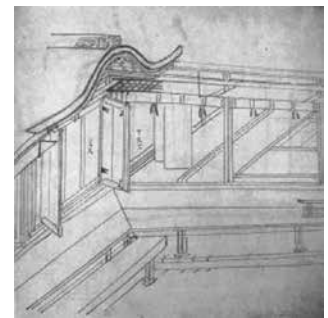


図22 「屋簷抜写」(東京藝術大学美術館蔵、住吉家粉本)